

# 軍隊における聖職者

——『ロランの歌』の大司教とアメリカの従軍牧師——

中 川 憲 次

## The clergyman in the army

——The archbishop of "The song of Roland"  
and American army chaplain——

Kenji Nakagawa

### はじめに

軍隊とは自国の平和のために他国を撃つ存在である。キリスト教は軍隊の存在をどのように考えてきたのだろうか。今回の我々の問題意識は、そもそも軍隊という存在とキリスト教の福音が相容れるかどうか、という点にある。ここでは、その点をめぐって、最初に古代キリスト教における軍隊観を瞥見し、次に武勲詩『ロランの歌』に登場するヨーロッパ中世初期の従軍聖職者とアメリカの従軍牧師とを比較検討し、一応の結論に至りたい。

## 1 キリスト教と軍隊

ここでは、古代キリスト教の軍隊観を一瞥すべく、使徒後教父と弁証家の言葉を取り上げる。

### 1. 1 使徒後教父

使徒後教父の一人、1世紀末にローマの司教であったと推定される司教クレメンスは、軍隊の存在に疑問など持っていなかった。その手紙に曰く、「そこで兄弟達よ、私たちは彼の非の打ちどころなき命令に従い、全力をあげて私たちの兵役を務めようではないか。私たちの司令官に兵士仕えしている者たちを考えてみよう。彼らは何と秩序だって、何と喜び進んで、また従順に命じられたことを遂行することか。総てが長官であるわけではなく、総てが千人隊長でも百卒長でも五十人部隊長でもなければ、その他諸々の長であるわけではないが、各々が各自の地位において、王や司令官らに命じられた事柄を果す（クレメンスの手紙—37章1節—3節）」（注2）。疑問を持つどころか、クレメンスは軍隊の秩序の在り方を礼賛している。

### 1. 2 弁証家

2世紀から3世紀にかけて活躍した弁証家テルトゥリアヌスは、その著『兵士の冠』の11章1節以下の「キリスト者の兵役」という文章において、軍隊という存在に疑問を投げかけている。曰く、「さて、そもそも兵士の冠の問題を論ずるには、まず第一に軍務が、すべてのキリスト者にふさわしいものかどうか吟味されなければならないと私は思う。（中略）われわれは次のように信じられるのだろうか。すなわち、人間への誓いを神への誓いに付け加えることができると、キリストの後に別の主人に服することができる、父や母やあらゆる親族を捨てることができると。律法は、彼らが神について尊敬され愛されることを命じており、また福音書もただキリストおひとりをおぼゆるものの上に置いてはいるが、同様に彼らをも等敬しているというのに。剣をとる者は剣で滅びると主が言っておられるのに、剣をとることが許されるのだろうか。訴訟を起こすこともふさわしくないのに、平和の子が戦闘に加われようか。自らに加えられた不正に復讐しようとしぬ者が、逮捕、投獄、拷問、処刑といったことにかかわれようか。さらに、キリストのためよりも、他の主人たちのために歩哨に立つことができようか、それも主の日に、しかもキリストのためにでなく。また放棄した神殿の前で寝ずの見張りをすることができようか。また、使徒のお気に召さない場所で食事をするとできようか。また、昼間、悪霊払いで追い出した悪魔どもを、夜には、キリストの脇腹を突き刺した槍に寄りかかって休息しながら守ることができようか。キリストに逆らう軍旗を持つことができようか。神からすでに合図を受けた者が、指揮官に合図を求めることができようか。（中略）信仰を受け入れ、〔洗礼によって〕印づけられたからには、多くの者たちがそうするように、直ちに〔軍務から〕離れねばならない。あるいは、神に反することを犯さないように、軍務の外では

許されていないことをしないよう、あらゆる方法をつけて口実を設けて避けなければならない。あるいは最後には、兵役についていない人の信仰も命ずるように、神のためにあくまでももちこたえなければならない。実際、軍務は罪の免責や殉教の免除を約束しはしないのである。キリスト者はキリスト者以外のなにもものでもない。福音はただ一つ、それは常に同じものである」(注3)。ここには、旧約の十戒における「殺してはならない(出エジプト記20章13節他)」や新約におけるイエスの「愛敵の教え(マタイ5章43-48節並行)」を念頭においての軍隊批判が歴然としている。

## 2 『ロランの歌』

われわれは、上記のようなキリスト教の歴史的な文脈における軍隊の位置を念頭においた上で、フランク王国成立過程における聖戦思想の直中の従軍聖職者の働きについて考えてみたい。すなわち、中世フランスの武勲詩『ロランの歌』の170行以下に、「大司教チュルパン(l'arcevesque Turpin)」が登場する。この物語は、スペインに滞在したシャルルマーニュ大帝の軍隊がサクソン人の攻撃を受けて778年8月15日にピレネー山中で壊滅したという史実に基づいて物されている。その戦闘において、「従軍牧師」の役割を果たしているのが件の大司教チュルパンである。ここではチュルパンについての記述から、中世初期の従軍聖職者の働きを探ってみたい。

ただ、『ロランの歌』は、史実を核にした物語ではあるが、やはり物語に過ぎないという側面はある。その記述が全て史実に忠実であるなどとは言えない。われわれが今回問題としている大司教チュルパンに関する記述にしても、この物語の単数あるいは複数の作者の理想的聖職者像が語られているのかもしれない。しかし、今回は一応その記述が中世の従軍聖職者像をほぼ反映しているものとして論を進めたい。

### 2. 1 大司教チュルパン

さて、大司教チュルパンについては、次のような記述がある。

ロラン伯、気絶より立ちかえり、  
両足にて立ち上がれど、はげしき痛みあり。  
下手のほうを眺めたり。また上手をも眺めたり。  
緑の草の上、戦友らの彼方に、  
高貴なる勇将の横たわるを見る。  
そは、大司教なり。神、名代として遣わし給いし者。  
大司教、胸を叩いて罪を謝し、さて、上に目を向け、  
天の方へ、両手を合わせて差し出し、  
天国を賜わらんことを神に祈れり。  
シャルルの戦士、チュルパンは死せり。  
度重なる激戦にても、幾多の見事なる説教によりても、

彼は生涯かけて、異教徒討伐の選手なりき。

神よ、願わくは、聖なる祝福を彼に賜え！ AOI.

(2233行—2245行)(注4)

ここで、この物語の主人公ロラン伯は、死んだ大司教チュルパンの生涯の働きを振り返りつつ、褒め称えている。ロランの言葉からは、チュルパンが死後に天国に行くことを単純に望んでいた様子がかがえる。天国についての約束は、チュルパンの説教の中心でもある。しかし「天国」については後で触れることにして、ここで注目したいのは、「シャルルの戦士、チュルパンは死せり。／度重なる激戦にても、幾多の見事なる説教によりても、／彼は生涯かけて、異教徒討伐の選手なりき」という記述である。チュルパンは大司教にして同時に異教徒討伐の戦士であったのである。ここには、テルトゥリアヌスにおけるような軍隊への疑問の入る余地のない、中世初期の状況がかがえる。

ところで、アニュス・ジェラルド著『中世社会(La societe medievale)』(邦訳『ヨーロッパ中世社会史事典』)は、中世の聖職者について次のように言う。「教会の聖職位階の上層部は、世俗の権力と非常に深くからみ合っている。そのため、司教と騎士、司教と貴族を見わけることができない場合も多い。司教はたいてい領主でもあり、その収入もかなりのものである。領主権にもとづく収入に加え、バン権力による収入、十分の一税の四半分、聖職者生計資産(その一部は司教座聖堂参事会に渡る形をとる教会収入)の一部、聖職の継承時に徴収される手数料なども入ってくる。また司教は、一種の<宮廷>をあたえられている。彼は領主であるがために俗人関係者(貴族、騎士、貴婦人)にとりまかれているし、大勢の聖職者たち(協働司教、主席司祭、司教総代理、文書局長、助祭長——執事長のようなもの)によっても補佐されている。こうした状況のもとにあって、司教の職はたいへん高く評価されていた。(中略)司教たちは、ことにその出自身分である騎士たちと、ほとんど区別がつかない。ランス大司教になったマナッセは、こんなふうに言うのを好んだ。<ミサを歌わなくてもよいのなら、ランス大司教の椅子の座り心地もよいのだが>。払った金でその座を手に入れ、騎士たちにとりまかれた彼は、聖職者の仕事などそっちのけで戦いを行なったのである。下級聖職者と同様に、ここにも聖職売買やニコライ主義がはびこっていた。十四世紀、聖職者がより自立するようになったとはいえ、こうした状況にさしたる変化はなかった。高位聖職者の多くは、霊的指導者としてよりも、むしろ大領主のように振舞い、貴族的な奢侈のなかに日々をすごしていた。そして、彼らの出世は君主の意向しだいであったために、なかには王宮に仕える者もいた。おおよそ彼らは、聖職者である以前に俗人だったのである」(注5)。さらに、同じ書物の「騎士身分」という項目の中でアニュス・ジェラルドは、「中世初期のあいだ、騎士という言葉は存在しない。当時のラテン語文献にお

いては、ミリテスという言葉だけが問題となる。それは兵士を意味しているにすぎない。とはいえ、戦場における騎兵の役割はしだいに拡大してくる」(注6)と書いている。大司教チュルパンこそ、まさに「聖職者である以前に俗人」、いや「戦士」であった。

## 2. 2 説教

従軍聖職者の任務の一つとして、まず説教を取り上げたい。『ロランの歌』には、大司教チュルパンの説教は、純粋に「説教」と題されたものとしては、次に示すもの一つしか出てこない。

また別に、チュルパン大司教あり、  
馬に拍車入れ、小高き丘に登る。  
フランス勢を呼び集めて、一場の説教を行なえり、  
「譜将諸公よ、シャルルこの地にわれらを残せり。  
われらの王のため、われらまさに死すべし。  
キリスト教の擁護に力を貸し給え。

われ諸公の霊の救かりのため、罪障消滅を宜せん。  
フランス勢馬を下り、大地にひれ伏せば、  
大司教は神の御名によりて、彼等を祝宥し、  
痛悔の業として、戦わんことを命ず。  
フランス勢、からだ起こして、立ち上る。  
罪障消滅を宜せられ、おのが罪を免ぜらる。  
大司教、神の御名によりて、彼等に十字をきり、  
かくて彼等は、駿馬に跨れり。  
騎士の道に従いて、武具武装を整え、  
今や、戦鬪の準備は全く成れり。

(1124行—1144行)

次のものは、以下に示すように「見解を述ぶ (Charles Scott の英訳では“The Archbishop speaks to them) 」とでも訳すほかない言葉で導入されているが、内容は紛れもなく説教である。

大司教、彼等にむかって、見解を述ぶ、  
「諸将諸公よ、まがごと思ひめぐらすことなかれ！  
神かけて、われ願うらくは、諸公遁れざらんこと、  
義人の一人だに、諸公のことを汚らわしくも歌にせ  
ざらんことなり。  
われら、戦いて死せんことこそ、むしろよし。  
そのときわれら、死に絶えんこと約束されてあり。  
今日の日過ぎて、われらすでに生きてはあらじ。  
ただ一つ、われこのことを確かに請合わん、  
聖なる天国は、諸公にゆだねられてあり。  
聖き幼児らの許に、諸公は坐すこととならん。」  
この言葉に、フランス勢、励ましを得て欣ぶ。

(1472行—1481行)

この二つの説教に共通する第一の要素は、味方の軍勢に対する士気の鼓舞である。大司教は言っている、「神かけて、われ願うらくは、諸公遁れざらんこと」と。すなわち「敵を前にして逃げるな、殉教せよ」というのである。そこには後の「十字軍説教」に通じる雰囲気がある。1088年に教皇に選任されたウルバヌス二世は、やがて最初の十字軍を検討した人物であり、「正確に再現したものはない」としつつも Edwin Dargan が伝えるところによれば、ある日、野外集会においてほぼ次のような内容の典型的「十字軍説教」を語ったという。曰く、「キリスト者は不信仰者に世界の三分の二を所有させておくことを恥じなければならない。その中には聖地も含まれ、それが彼らによつて汚されている。彼らの手から、聖なる場所を救い出すための聖戦に参加するものにはすべて完全な免罪を約束する。この企ての途中で死ぬものには天国が確約される。成功すれば、われらの主の聖墳墓を見るであろう。なぜ死をおそれなければならないのか。十字架の兵士として進み出よ」。そして、「この演説は熱狂を呼び覚ました。人々は剣をふりかざして『それが神のみこころだ』と叫んだ。かくして十字軍が始まった。時宜を得た、強力な雄弁に魅せられてであった」とダーガンは付け加えている(注7)。このような「十字軍説教」と、われわれの『ロランの歌』のチュルパンの説教は、実によく似た響きを持っていると言えよう。

また、大司教チュルパンは確かに味方の軍勢の士気を鼓舞するのに適任の男であった。それをよく示すのは、主人公ロラン伯が戦場に赴こうとする時のチュルパンの様子を描く792行以下の記述である。

ロラン伯は、軍馬にまたがれり。AOI  
彼をさして、その戦友オリヴィエ出で来る。  
ジェランも来れり、忠勇ジュリエ伯も来る。  
オトン来れり、ベランジェも来れり。  
ついでアストール来る。勇猛アンセイスも。  
老将ルッシヨンのジェラルル来る。  
権勢ある公爵ゲフィエもそこへ来れり。  
大司教いう、「わが頭にかけて、われ行かん！」  
(792行—799行)

チュルパンは、「わが頭にかけて、われ行かん！」と志願して従軍した聖職者だったのである。彼は騎士にして聖職者だったのである。それは、チュルパンが死んだ時のロランの言葉からも明白である。

ロラン伯は、大司教の地に伏すを見たり、  
体中より臟腑出でて広がるを見る。  
額の上より、脳漿たぎり出で、  
胸の上、両の肩骨の間に、  
その白き、美しき〔手を〕組み合わせたり、  
ロラン、故国の習いわきまえつつ、力をこめて哀悼

す。

「あゝ、高費なる士よ、名門の騎士よ、  
今日しもわれ、天に在す栄光ある者に君を托す。  
君にまさりてころよく、神に仕えし者、未だなし。  
使徒たちの御代よりして、かかる聖職者はなかりき、  
教義を護り、これに人々引きつけんため。  
願わくは、君が霊、糧の不足に悩まざらんことを1  
天国の門、君が霊にむかって開かれんことを！」  
(2246行—2258行)

チュルパンは、「名門の騎士」にして、同時に「使徒たちの御代よりして、かかる聖職者はなかりき」と言われるほどの聖職者だったのである。

チュルパンの先の二つの説教に共通する第二の要素は、罪の赦しに伴う天国の約束である。戦死を恐れるなど呼びかけるにあたり、彼は天国を持ち出すのである。ここで、チュルパンは聴罪司祭の役割を果たさんとしている。1100年頃に成立したと思われるこの『ロランの歌』に、聴罪司祭の役割を果たす大司教が登場しているということは、聴罪司祭の働きが、1215年の第四回ラテラノ教会会議において復活節における年一回の罪の告白が教会員に義務づけられる以前からヨーロッパに定着していたことをうかがわせる。

そして、ついに天国が問題である。再びアニユス・ジェラルドを引用したい。曰く、「中世のキリスト教徒の一生において、あの世は、たいへん重要な存在である。教会が、肉はやがて消えさる運命にあるとして、肉体の軽視を説けば説くほど、またこの世での生が、災禍や、不平等や、罪悪に満ちていればいるほど、その重要性はますます高まる。他方、人々は靈魂の不滅を認識している。その不滅性を信じるがゆえに、この世での生もまた、不安に満ちたものになるのである。それなのに、まだ煉獄が発明されていない十二世紀、最後の審判の期日を楯に脅かされた信者たちは、天国か地獄か、そのどちらかしか選べなかったのである。天国にたどりつける可能性はすべての人々にあたえられていたし、辛酸をなめた者ほどその確率も高かった。貧しい者たちにはその保証さえあたえられていたが、何の慰めにもならなかった。中世のイマジネールにおける天国の姿は、遠くオリエントのそれとは異なっていた。はじめのうち、人々は、そこに座す威厳に満ちて王者らしい御父の姿を想像し、またときに、家臣たちの頂点に座して勝ち誇る封建領主の姿を想像した」(注8)。このような思想環境のもと、『ロランの歌』で天国は次のように描かれる。

ロラン、山の方、岡の方を見わたせり。  
フランス勢のかくも多く死に、横たわるを見て、  
心床しき騎士にふさわしく、彼等の上に涙す。  
「諸將諾公よ、神、汝等に慈悲垂れ給わんことを！  
汝等の霊のすべてに、天国を賜わらんことを！」

神、聖なる花に囲まれて、御霊を横たえさせ給えかし！

(1851行—1856行)

ロランにとって天国とは「聖なる花に囲まれて、御霊を横たえさせ」られる所である。また、大司教チュルパンも味方の兵士の屍を抱きつつ言う。

大司教、涙せきあえず、  
手を上に挙げ、祝福を行ない、  
ついでいう、「各々方よ、いたましや！  
願わくは、栄光ある神、汝等の霊がのこらず迎えられ、  
聖き花に囲まれて、天国に置き給わんことを1  
われもまた、死の苦しみ甚し。  
権勢ある皇帝にまみゆることなからん。」  
(2193行—2199行)

大司教にとっても、天国は「霊がのこらず迎えられ、聖き花に囲まれて置」かれるところである。すなわち、『ロランの歌』の天国観は、聖なる花に囲まれた心休まる場所というだけである。

## 2. 3 仲裁者

大司教チュルパンは、戦場におけるロランとオリヴィエの仲違いを仲裁している。1737行以下である。

大司教、二人の口論を聞き、  
純金の拍車にて、馬の腹蹴り、  
二人の前まで来りて、たしなめることとせり。  
「ロラン殿よ、そして君、オリヴィエ殿よ、  
神かけて君らに願うらく、口論はやめられよ！  
角笛吹くの必要も、やがてなくならん。  
さはさりながら、吹くに越したることはなし。  
王にしてみし来らば、われらの仇を討ち得ん。  
スペインの輩、喜び抱きて帰還することあつてはならじ。  
われらのフランス勢は、ここにて馬を下りん。  
われら討死し、手足もがれし姿を見出ださん。  
われらを柩に入れて駄馬の背に積み上げん。  
悲しみと憐み抱きて、われらに涙せん。  
聖堂の中庭に葬らん。

このような仲裁ができるのも、チュルパンが戦闘状況に通曉した聖職者なればこそである。彼は、戦場を己が現場としつつ戦場における牧会の業に勤しんだのである。戦場において、ただ祈る人に徹するなどということは彼には考えられなかった。

大司教いう、「天晴れなる武者振りかな！  
騎士たる者、かかる勲功立つべきなり、

ものの具そろえ、よき馬に乗れる限りは。  
即ち、戦に臨みては、強く猛くあるべきなり。  
さもなくば、彼は四文の値打ちなし。  
彼むしろ、このあたりの修道院にて僧となり、  
われらの罪のため、日々祈りを行なえかし。」

(1876行—1882行)

チュルパンは、「斬って斬って斬りまくれ」というのである。修道院における修道士の祈りなど、戯れ言に過ぎぬとでも言いたげな口ぶりである。このような箇所を読むと、『ロランの歌』についてのフランコ・カルディーニの次のような言葉が説得的に響いてくる。曰く、「ここ数十年來、『ロランの歌』の独創性をはじめ、叙事詩の役割と古い戦闘的伝統、つまり確かに異教的ゲルマニアの古代にまでさかのぼれる伝統との関係が議論されている。だが確かなことは、ロラン伯のそばまで降りてきて、ロランを天国までつれてゆく天使たちがワルキューレと言われる乙女たちの写しではないことである—これは間違いなくキリスト教的天使であるが、それでも祖先の戦闘的伝統、さらにはそれ以上に、新約聖書というよりはむしろ旧約聖書の影響を受けた教会論から来る概念的価値と感受性の全体で再会し、再読される。叙事詩の戦士ミカエルは聖書の〈主の軍隊の司令官〉であり、またロランのキリスト教的な神は、たとえ詩の中で〈マリアの子〉として愛をもって思い出されることが多いとしても、それは実は何よりもまず恐るべきイスラエルの神 (Dominus Deus Sabaoth)、つまり戦闘と復讐の王である」(注9)。確かに、上の箇所でも、大司教チュルパンを支配しているのは「戦闘と復讐の王」である。

## 2. 4 『ロランの歌』における「平和」

『ロランの歌』には「平和 (pais)」という言葉が12回出てくる(注10)。このうち、『ロランの歌』が「平和」をどう理解していたかをよく示していると思われる3596行を引用する。すなわちシャルルマーニュ曰く、「異教徒に、和平も愛も、われ与うべきならず(No peace nor love may I to pagan lend.)」。このように、『ロランの歌』の平和は、異教徒、すなわち敵をその視野から排除した平和である。「愛敵の教え」など、全く知らないかのごとくである。

## 3 アメリカの従軍牧師

アメリカの「アメリカ従軍牧師のセンターと学校 (United States Army Chaplain Center and School)」のホームページに『従軍牧師団小史 (Brief History of the Chaplain corps)』(注11)という論文が発表されている。その論文に依拠しつつ、アメリカの従軍牧師について以下に略述する。

### 3. 1 アメリカの従軍牧師制度の成立

アメリカの軍隊に従軍牧師制度が確立したのは1775年7月29日である。すなわち独立戦争の第2回「大陸会議」が、この日に、従軍牧師に公的な承認を与えたのである。しかしたとえば、ロードアイランドにははじめ従軍牧師がいなかったが、やがて大部隊によって従軍牧師が選任された。また、ニューハンプシャーでは地方の聖職者を従軍牧師として選んだ。

従軍牧師にアメリカ合衆国大統領によって直接権限が与えられたのは、1867年のことだったという。そして1898年の米西戦争が起こる。この戦争は1882年にアメリカ合衆国がジュネーブ協定に調印して以来初めての、海外に展開したアメリカ軍に従軍牧師が非戦闘員として随伴した戦争であった。

### 3. 2 戦士としての従軍牧師

アメリカの従軍牧師の歴史の中で注目すべき一人は、1846年に始まったメキシコとの戦争で、1847年1月にメキシコのゲリラに殺されたアンソニー・レイ (Anthony Ray) である。彼はアメリカ陸軍の従軍牧師として戦死した最初のローマ・カトリックの従軍牧師であった。このアンソニー・レイの場合こそ、我々が先に見てきた『ロランの歌』におけるチュルパンと重なり合う事例であろう。

その後、1861年から1865年にかけての南北戦争においては約3000人の従軍牧師が陸軍軍法会議法の規定に従って任命された。そして、アンソニー・レイと同じように戦いで死んだ従軍牧師が25人あったことが知られているという。

たとえば、チャールズ・マケイビー (Charles McCabe) という従軍牧師は、負傷している軍人を守るために、ウインチェスターからの退却を拒否したという。同じく、従軍牧師ロバート・ブラウンは、軍人達に対して、立ち、そして戦うように促がしたその冷静かつ勇敢な態度において歴史に名をとどめているという。以上の事例は、軍隊の士気を鼓舞するということが従軍牧師の働きの一つであることを示している。

### 3. 3 従軍牧師の礼拝と説教

『従軍牧師団小史』は、従軍牧師の指導した礼拝の様子も記している。最も重要だったのは、野外あるいはキャンプ・ファイヤーのまわりのテントの中で行った礼拝であったという。そのような礼拝における従軍牧師の説教のテーマは、理想的な愛国心か、悪口、賭け事、酩酊などの悪いふるまいに対する説諭かのどちらかであった。

第一次世界大戦の最中には従軍牧師は、壕や食堂や村の教会や、さらには森の中でまで礼拝を司った。そこで説教は切迫した状況に即したもので、単純で、形式ばらず、直接的に、軍人の言葉で語られた。

ヴェトナム戦争では、初期には8人の従軍牧師が派遣

されたに過ぎない。彼等は、特にヘリコプターで移動してヴェトナム各所で礼拝を行ったという。1967年頃には従軍牧師達は、ジープのフロントの上や、掃海艇の中で祭壇を整えて礼拝を行ったという。

### 3. 4 教育者としての従軍牧師

さらに、従軍牧師達は平時においては、読み書きのできない軍人に識字教育のための非公式の学校を開いたという。従軍牧師は教育者でもあったのである。ただ、その学校の学生である軍人達は、しばしば疲れ果てていて、学習に集中できなかつたようである。

### 3. 5 臨終に立ち会う者としての従軍牧師

ウィリアム・コービイという従軍牧師が、砲火の中で死にゆく軍人に対して「総赦免 (General Absolution)」を与えたということが伝えられている。すなわち、アメリカの従軍牧師の任務の一つは、その軍人に罪の赦しを与えて、平安のうちに死なしめることであった。

第二次世界大戦においては、8896人の従軍牧師がアメリカ陸軍に勤めていたという。日本が真珠湾を攻撃した時に、その攻撃の直中で礼拝を行おうとしていた従軍牧師についても伝えられている。その牧師はテレイス・フィネガン (Terrace Finnegan) という。フィネガンは攻撃が始まったのを知って、礼拝のために集まっていた軍人達に危険を知らせるために車を走らせ、地上掃射されながらも何とかたどりつき、集会を解散させた。しかし、6人が死んでしまった。フィネガンは死んだ軍人のために、その場で最期の儀式を行ってやったという。第二次世界大戦においても、従軍牧師の役割の最たるものは、『ロランの歌』の大司教の場合と同様に、死に行く兵士の最期を宗教的に意味付けることだったのである。

この頃に、戦死者を集め、フルネームを確認し、死んだ時と場所を確実に報告するという任務が、従軍牧師の任務に加わった。もちろん、従軍牧師はそのような報告をするだけでなく、遺族を慰める手紙を書いたりもしたという。

### 3. 6 捕虜となった従軍牧師

第二次世界大戦では、従軍牧師が捕虜になるということも起こった。日本では、捕虜になった従軍牧師は礼拝を行えなかつた。そのため従軍牧師はしばしば説教を書きつけた紙で小石を包んで、適当な時に柵の向こうの捕虜達に投げ渡したという。

朝鮮戦争においても、多くの従軍牧師が捕虜となった。悪条件の中で死んだ者もいたが、生き残った者のうち多くが休戦後韓国に留まり、160人以上が牧師や聖書の教師として生きることとなったという。

### 3. 7 国家の番犬としての従軍牧師

ヴェトナム戦争当時、アメリカ合衆国の反戦感情が高

まり、多くの軍人が良心的兵役拒否者となった。この時、従軍牧師に兵役拒否の考えを持つ軍人を発見して当局に報告するという新しい任務が与えられたという。

### 3. 8 その他の働き

その他の従軍牧師の働きは、平時における牧師の働きと変わらなかつたようである。すなわち、夕べの祈祷会や「礼装観閲式 (dress parade)」で祈りの務めを果たしたり、洗礼式や葬式や結婚式を司ったのである。また、軍人のうちの病人や負傷者に助言し慰めを与えて、牧会したのである。

第一次世界大戦前夜には、従軍牧師の役割の中に新しいものが加わっている。それは、軍隊生活の倦怠感やストレスを緩和させるという働きである。従軍牧師は、テントの中での映画会を準備したり、手紙を代わりに出してやったり、あるいは性教育のプログラムを計画したりしたのである。

## 結 び

我々は『ロランの歌』を手懸かりに、軍隊における聖職者の果たす役割について考えてきた。『ロランの歌』には、戦争行為そのものに対する疑問は微塵も見られなかつた。大司教チュルパンは、当面の戦争を聖戦と確信して、味方の兵士を神の名において叱咤激励し、敵前逃亡を禁じ、殉教としての戦死を覚悟して戦うように奨めるのである。初期キリスト教の弁証家が抱いた疑問など、入り込む余地はなかつた。

事情は、アメリカ合衆国の従軍牧師の歴史においても、ほぼ同じであった。従軍牧師は、「聖戦」思想の範囲内で、軍人の最期に総赦免を与える者として立ち会うのである。従軍牧師は、まさに「従軍」した者として、たとえ「良心的」兵役拒否者といえども、兵役拒否者は発見して当局に報告せねばならなかつたのである。現在のアメリカの従軍牧師を支える思想には、テルトゥリアーヌにおける兵役への躊躇は入り込む余地がなく、むしろ「異教徒に、和平も愛も、われ与うべきならず」と言いきるシャルルマーニュの下で忠誠を尽くして働いた『ロランの歌』の従軍聖職者の在り方が時空を超えて脈打っていると言えよう。そこには、イエス・キリストの愛敵の教えは力となっていない。キリスト教の福音の真骨頂を示す愛敵の教えの力に与っている者が、敵を殺す集団である軍隊を作るはずもなく、またそこで従軍牧師として働くことなど、まず考えられない。軍隊がすでに存在しているとすれば、良心的兵役拒否こそ、愛敵の教えの先に続く道であろう。

『ロランの歌』の時代から現代にいたるまで、従軍牧師は確かに存在してきた。その働きは、華々しく見える場合さえあつた。しかし、その働きがいかに華々しくとも、またその折々に実存的に尊い働きをなした従軍牧師

がいたとしても、なお従軍牧師という存在はキリスト教の歴史におけるあだ花であったことは、以上の考察で明かであろう。

ただ、今も軍隊は世界中に厳然として存在している。聖職者はその直中で生きるようにとの内的促がしを受けることがあるであろう。その者は、福音に耳を澄ましつつ、歴史上の従軍牧師の在り方について熟考し、できる限りのことをするほかないであろう。敵を殺す集団である軍隊の内懷で、敵を愛す道を行くことの困難さは想像を絶するが、そうするしかないであろう。

## 注

- 1、以下、聖書の引用はすべて日本聖書協会『新共同訳聖書』による。
- 2、「クレメンスの手紙——コリントのキリスト者へ（1）」37章 1節—3節（荒井献編『使徒教父文書（＜聖書の世界＞別巻新約Ⅱ）』、1974年、講談社、77頁
- 3、小高毅編『原典古代キリスト教思想史——1 初期キリスト教思想家』1999年、教文館、236頁—237頁
- 4、以下、『ロランの歌』からの引用はすべて、有永弘人訳『ロランの歌』（1955年、岩波書店）による。
- 5、アニュス・ジェラルド著、池田健二訳『ヨーロッパ中世社会史事典』1995年、藤原書店、204頁—205頁
- 6、同書78頁
- 7、エドウィン・ダーガン著、中嶋正昭訳『世界説教史 I 古代—14世紀』1994年、日本基督教団出版局、212頁
- 8、アニュス・ジェラルド前掲書19頁
- 9、ジャック・ル・ゴフ編、鎌田博夫訳『中世の人間—ヨーロッパ人の精神構造と行動力—』、法政大学出版局、1999年、94頁—95頁
- 10、73, 217, 263, 265, 392, 395, 423, 595, 907, 1027, 1931, 3596の各行
- 11、「アメリカ従軍牧師センターと学校」のホームページ（<http://160.150.55.11/chaphp.htm>）所収